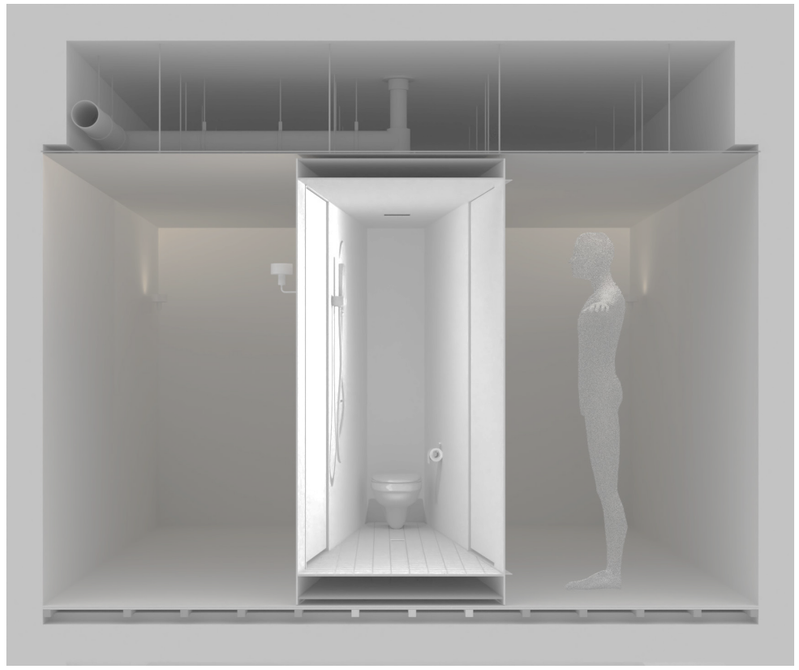
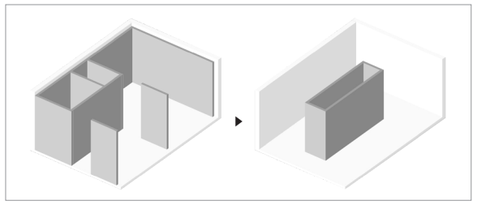
7.39㎥の転回する壁体

一般的なワンルーム 28㎡の賃貸空間において、2 人の人間の為の空間を用意することは容易ではない。なぜなら賃貸空間における必要最低限の機能や設備は既に最適化され、他者の介入を想定していない為である。そこで 2 人分の空間を隔てて用意するのではなく、ワンルーム 28㎡を限りなく共有することで、ふたり部屋として提案することはできないだろうか。

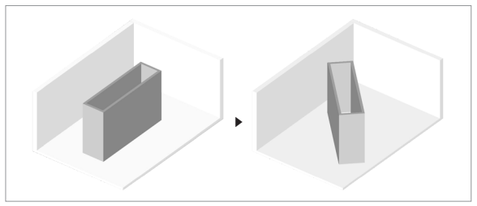
賃貸空間における水回りの機能を 7.39㎥の気積に集約し自立させる。空間の中心に配置された気積の内側ではトイレ、シャワールーム、キッチンなどの生活に必要最低限の機能と設備、有効面積を備え、部屋の中心を軸として回転する。

この 7.39㎥の気積は、28㎡の限られた面積を 2 人の人間の為のワンルームとして扱う装置としての提案である。

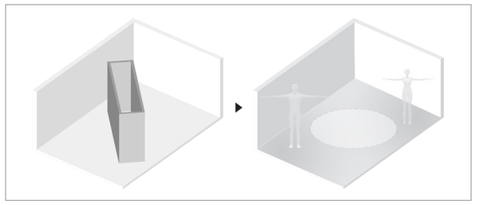




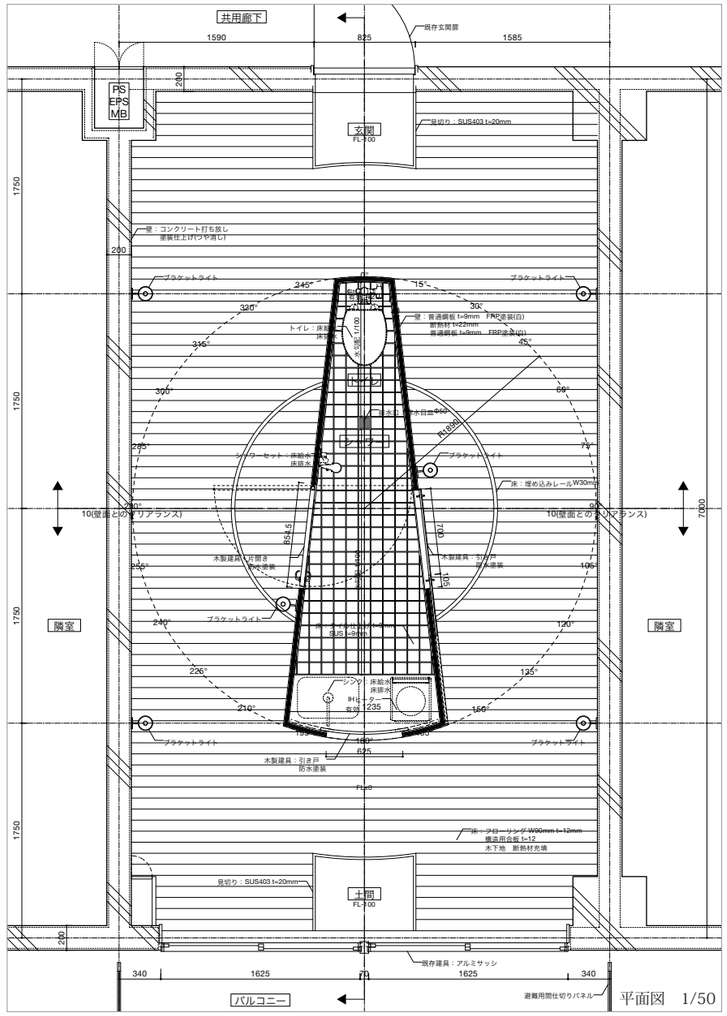
水回りの空間を一箇所に集約させる。必要最低限の機能が 1 箇所に集約されることによって、28㎡のワンルームに対して多くの有効面積を確保することができる。

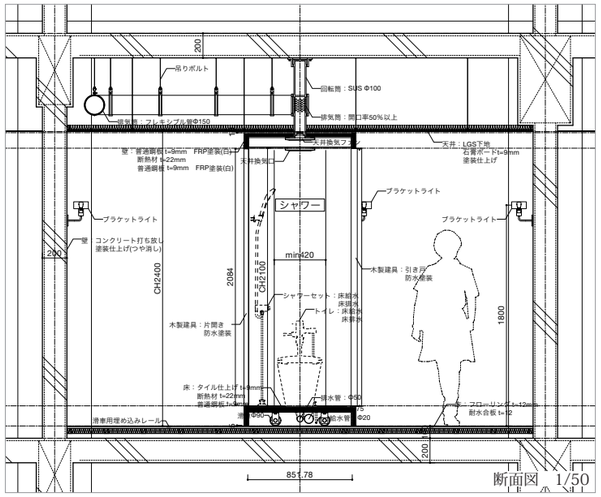


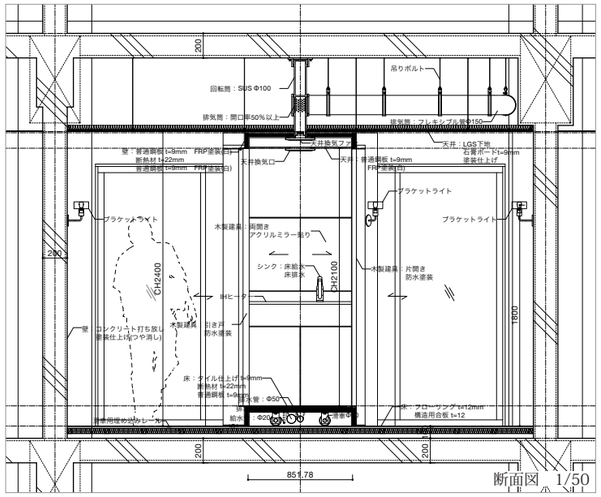
必要最低限の機能を 1 箇所に集約した立体を賃貸空間の中心に配置し、中心を軸として回転するようなシステムを考える。こうすることで空間を自由に変化させることができる。

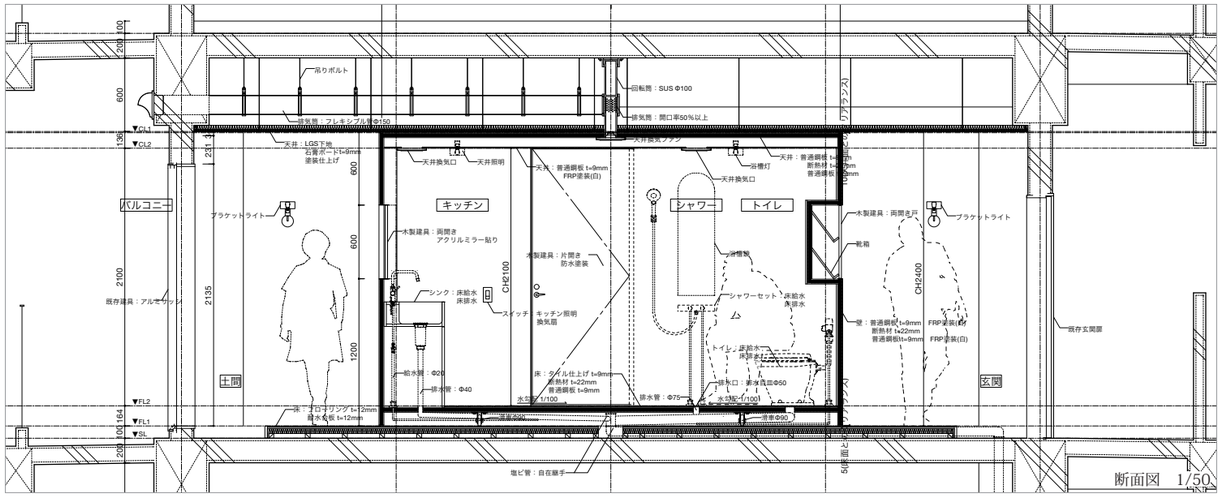


2 人の人間は、あくまでワンルームのなかで、お互いの決まった部屋を持たない。7.39㎥の立体を、時々に合わせて転回しながら 28㎡の空間を余すことなく、生活してゆく。

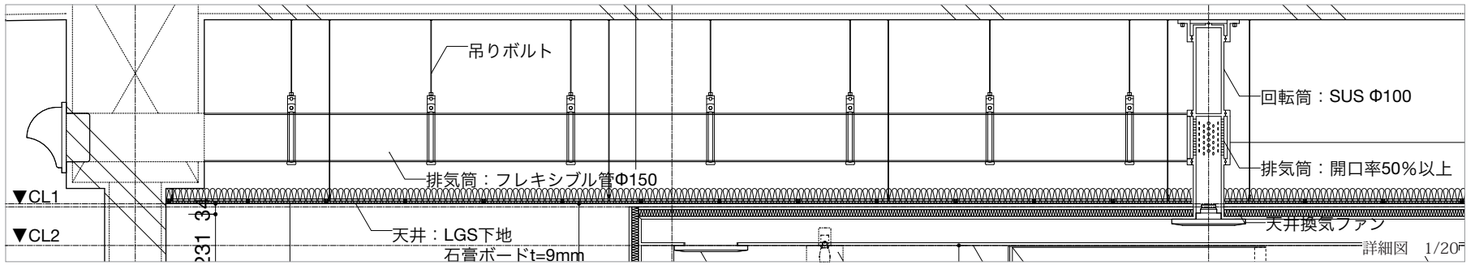


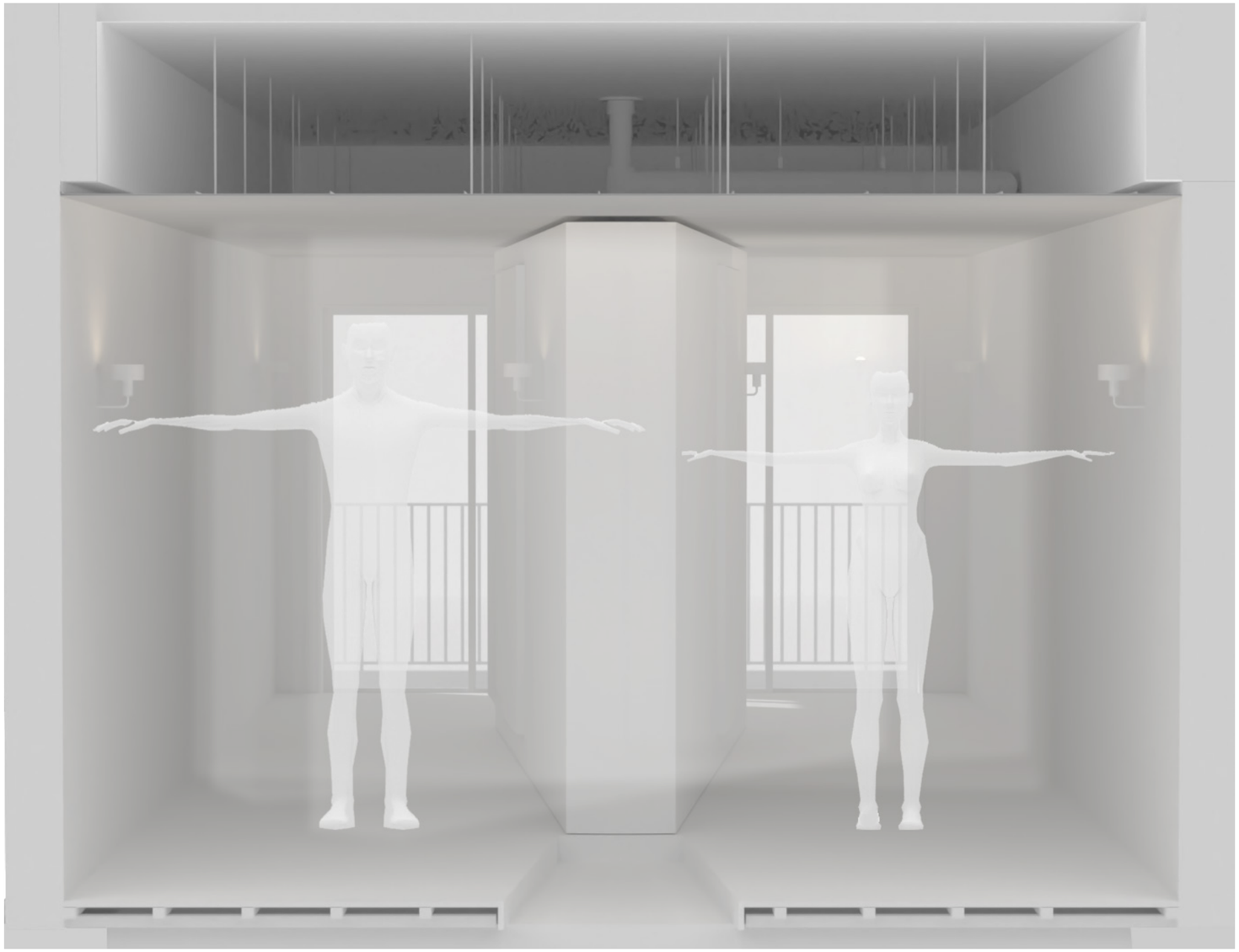


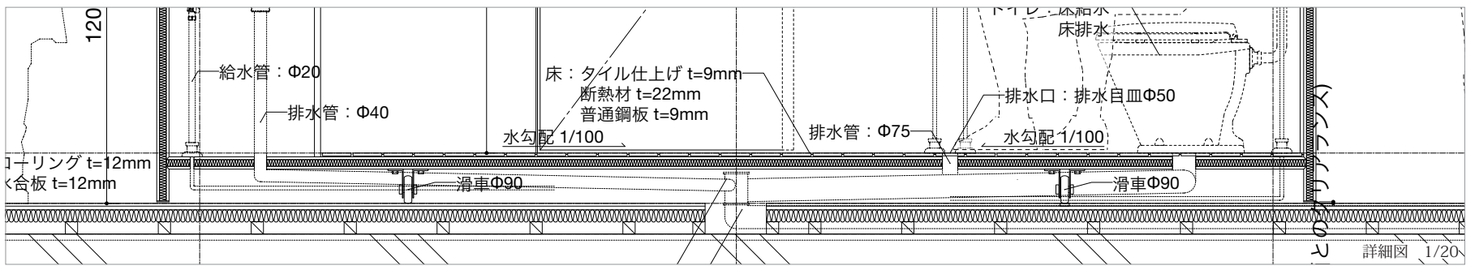




東京藝術大学大学院　岡倉慎乃輔＋西本光







◀起床時、カーテンを開けるように壁体を転回し、部屋に朝日を取り込む様子。お互いの状況に合わせてバルコニー側へ垂直に転回することで外部からの光量を調節し、1 日がはじまる。

▶バルコニー側にキッチンを転回し、開放的に昼食を摂る。キッチン周辺を広く設け、壁体に設けた開口を介して 2 人で食事の準備を行う。

▼外出の際には壁体を転回し靴収納を玄関側へ。バルコニーに出る場合は、壁体を 180°転回することで靴箱をサッシ側に移動することができる。

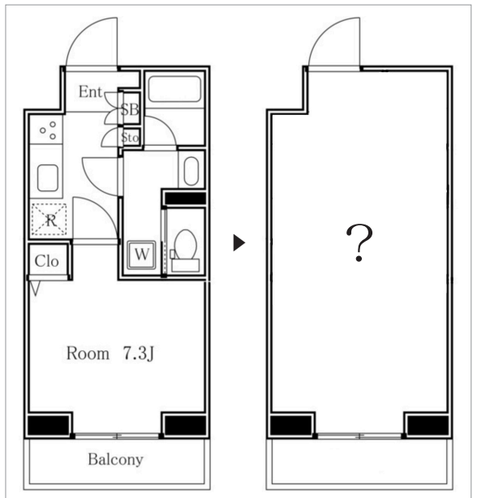
▲部屋を分割して互いの時間に没頭する。別個室状態となるよう壁体を転回すると、水回り空間は空気層となり、お互いの生活音や光による干渉を和らげる。

◀壁体の扉を開閉することで、向こう側の空間を間接照明として扱い、好みの照度に調節する。就寝時には扉を閉め、就寝に適した暗い空間で 1 日を締め括る。

東京藝術大学大学院　岡倉慎乃輔 + 西本光

■賃貸における 28㎡

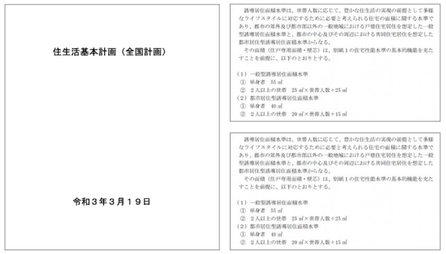
下記の図 (左) は一般的な 28㎡の間取り図である。一般的な賃貸住宅における 28㎡の間取りは一人暮らし用として扱われることが多く、面積的に 2 人分の生活面積を用意することは難しい。そこで従来の間取り図を元に類型化し、その構成を再度見直すことで、2 人分の面積を確保する可能性を探る。



引用：株式会社エイブル　お部屋探し検索ページ　https://www.able.co.jp/

■賃貸空間における基準面積

2 人暮らしにおける面積基準について、国土交通省による「住生活基本計画 (全国計画)」を参照すると、都市部の賃貸空間の場合、2 人が生活するための面積について都市誘導居住面積水準は 55㎡、最低居住面積水準は 30㎡と記されている。つまり基準では最低でも 30㎡の面積が必要であり、28㎡に 2 人分の生活面積を用意するには、従来的な " 決められた範囲のなかで機能ごとに面積を確保し空間を隔てていく構成 " では 2 人分の面積の確保は難しいことが分かる。



住生活基本計画（全国計画）

令和３年３月１９日

都市において 2 人が生活するための最低面積

最低居住面積水準

10㎡ × 世帯人数 + 10㎡ = 30㎡

引用：国交省『住生活基本計画における誘導居住面積水準および最低居住面積水準』別紙 3, 別紙 4 による

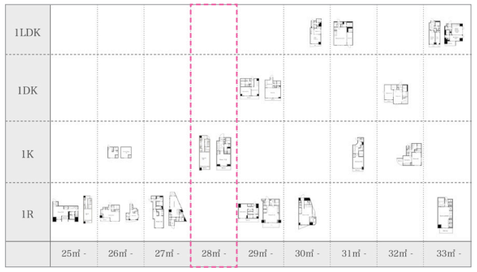
■ 25~35㎡の間取り図の収集

国土交通省による基準では都市部における賃貸空間では 2 人分の生活面積は最低でも 30㎡が基準であることが分かった。現状の募集されている賃貸空間の間取りについて 30㎡を基準として、25~35㎡のものを収集し類型化を試みる。

引用：株式会社エイブル　お部屋探し検索ページ　https://www.able.co.jp/

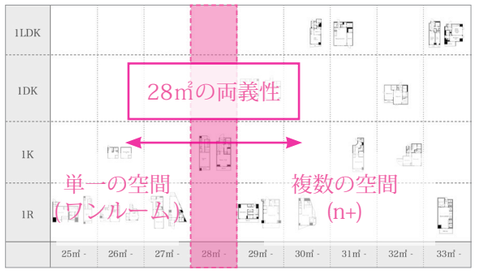
■ 28㎡周辺間取り図の類型化

下記の表は 25~35㎡の床面積を持つ間取り図について、面積と間取りの関係を表したものである。縦軸を間取り形式、横軸を面積に収集した間取りを類型化すると、28㎡を基点に 2 つ以上の個室を持つ間取りが現れ始めることが分かる。つまり 28㎡という面積は現状の不動産では単一の空間 (ワンルーム) と複数の空間 (n+) の両義性を持つ面積として扱われていることが分かる。



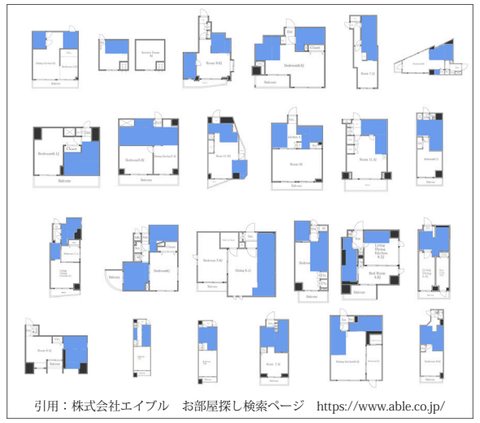
■ 28㎡における仮説

調査結果のように、28㎡の面積は市場的に単一の空間 (ワンルーム) や複数の空間 (n+) として扱われる。これらを考慮し 28㎡という床面積は "1 つの個室を持つ状態 " と " 複数の個室を持つ状態 " を同時に扱うことができる、翻って 2 人分の生活空間を確保できるという仮説を立てた。



■従来型の間取り図の分解

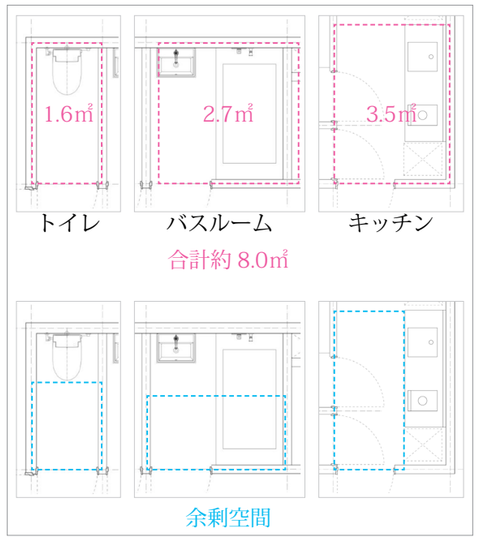
28㎡の面積について従来型の " 決められた範囲のなかで機能ごとに面積を確保し空間を隔てていく構成 " では 2 人分の面積確保が難しいことは述べた。そこで賃貸住宅空間における個人の専有面積部分と共有可能な面積部分について見直すことで再構成を試みる。そこで共有可能である水廻りの空間を対象に、左図 25~35㎡の間取り図における水廻り部分について青色で示したのが下記の図である。



引用：株式会社エイブル　お部屋探し検索ページ　https://www.able.co.jp/

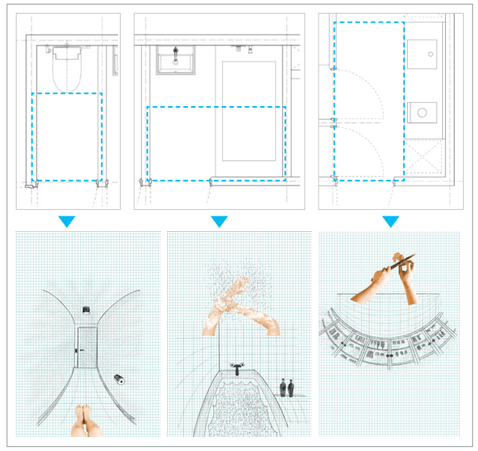
■住居部分と水廻り部分の面積比

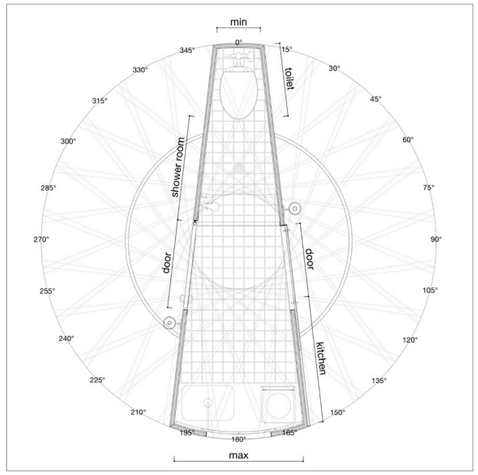
上記の調査によると、25~35㎡の賃貸空間における水廻りの面積は平均、トイレが 1.6㎡、バスルームが 2.7㎡、キッチンが 3.5㎡であった。合計約 8㎡、つまりは賃貸空間における床面積の 25~30% 程度が必要であることが分かった。こうした水廻りにおける空間を共有可能な余剰空間として捉えることで、28㎡における新しい間取りを考えることはできないか。



■水廻り空間の再構築

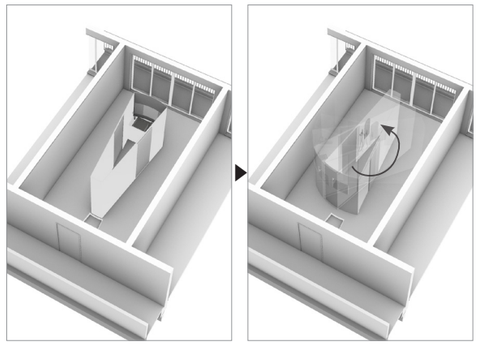
水廻りの空間の一部を余剰空間として捉え直し、それらを住居部分の面積比に照らし合わせながら最低限の面積で再構築する。そうして出来上がる空間を共有部として一室に昇華させる。





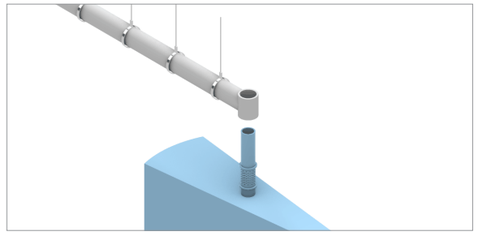
■ 7.39㎥の転回する壁体

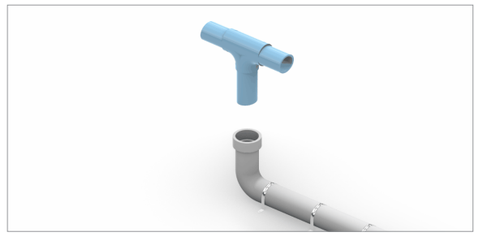
こうした室を 28㎡のワンルームの中心に配置し、転回する仕組みを考えることで個室自体が共有の室として機能しながら、空間を様々に隔てる為の壁体としても機能させ、28㎡を分割して専有できる状態と、共有できる状態をつくる。



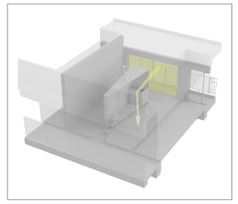
■排気筒、排水管としての回転軸

壁体は中心に据えた天井部分の配気管と床下部分の排水管、床との取り合い部分に取り付けた滑車によって転回する。天井懐の排気については、回転軸に小さな穴を空け換気ダクトを接続することで壁体の角度に関わらず空気を流す仕組みをつくる。床下の給排水については、壁体内で管をまとめ、転回する機構の蛇口と同様の仕組みで排水する。

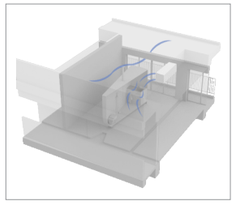




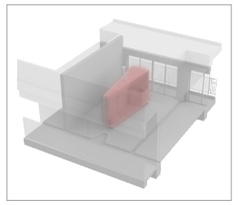
■ 28㎡における壁体の効果



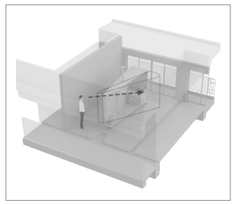
開口部からの光や照明を調整するものとして



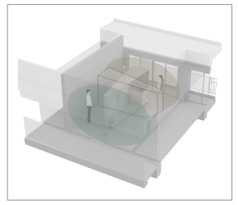
開口部からの風や空調を調節するものとして



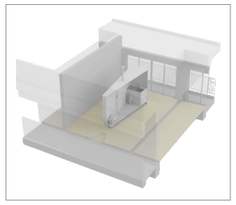
熱源を介して温度を調整できるものとして



来客や同居人の視線を調整できるものとして



気分や環境に臨機応変に対応するものとして



新しい水廻り空間のユニットシステムとして

東京藝術大学大学院　岡倉慎乃輔 + 西本光